

県中教研 道徳部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 北村 陽一
題 字 金山 泰仁 先生

「考え、議論する道徳」への転換

指導主事 金山 光昭

道徳教育は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」を目標とする教育活動です。この目標を実現するため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」への転換を図ることが求められています。

本年度参観した道徳科の授業では、「考え、議論する道徳」への転換を図るために、様々な工夫がされていました。ある授業では、教師がファシリテーター役として、論点を整理し議論を進め、生徒同士が自分の考えを本音で語り合う姿が見られました。別の授業では、ペアやグループによる話し合いを取り入れたり、教室を移動して級友たちと意見交換したりして、対話することが意図的に取り入れられていました。他者との対話で、自分の考えを確認し、新たな気づきを得ている生徒の姿も見られました。

「考え、議論する道徳」は、子供たちが自己の生き方を見つめながら、他者と多様な視点から話し合ったり、語り合ったりすることを通して、自分自身のよりよい生き方を考えていく学習です。このことは、学習指導要領の中心である「主体的・対話的で深い学び」と共通し、生徒が「こんな考え方があったらいいな。確かにそうだ。」と、「発見」と「納得」のある「深い学び」を生み出す授業につながります。そのためには、この授業で生徒にどのような道徳性を養うのかという「ねらい」を明確にしておくことが大切です。

生徒にとって、「道徳って楽しいな」「また道徳の授業がしたいな」と感じられる、そして、全教育活動を通して行われる道徳教育によって、子供によりよい生き方を求める道徳性が着実に育成されることを願っています。

(東部教育事務所)

「考え、議論する道徳」に向けて

部長 北村 陽一

令和6年度から3年計画で、内容項目「C 主として集団や社会との関わりに関すること」を中心として研究を推進しています。副題として1年目は「『考え、議論する道徳』に向けた発問の工夫」、2年目は「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」、3年目は「『考え、議論する道徳』に向けた授業展開の工夫」に焦点を当て研究を進めています。今年度は2年目で「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」の研究に取り組みました。

第69回研究大会では、東部大会を富山市立東部中学校、西部大会を射水市立小杉中学校で開催しました。東西研究大会の各授業において、今年度の副題である「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」として「生徒一人一人が自分と向き合い考える場」「ICTを活用してアンケート結果や意見を共有する場」「自席周辺の人や自由に立ち歩き自席周辺以外の人と議論する場」「意図的な班編成やコの字型の配置で議論する場」「教師がファシリテーターとなり議論する場」等、様々な場を設定しました。このように場の設定を工夫することで、生徒の思考が促され生徒が活発に話し合い、道徳的価値に対する考えを深めることができることが分かりました。このことから「考え、議論する道徳」の実現に向けての手応えを感じることができました。しかし、「場の工夫」のみで「考え、議論する道徳」が実現できるわけではありません。どのような「場」を設定したとしても、それは指導方法の1つであり道徳性を養うための手立ての1つに過ぎません。より明確な自分の感じ方や考え方をもつためには、まずは吟味された「発問」によって生徒の思考を多面的・多角的に促し、さらに様々な「場」で生徒が多様な感じ方や考え方に会い、交流するという一連の流れが必要不可欠です。すなわち、昨年度取り組んだ「発問の工夫」があってこそ「場の工夫」であることや、「発問の工夫」と「場の工夫」とのつながりが重要であることが言えると思います。

さて、令和8年度の県中教研道徳部会は「『考え、議論する道徳』に向けた授業展開の工夫」を副題として研究を進めます。「道徳的価値の理解を基に、導入で問題意識をもたせ、展開で自分との関わりの中で多面的・多角的に考えさせ、終末で自己の生き方について考えさせる」という授業展開が一般的ですが、これにとらわれることなく、「考え、議論する道徳」を目指すためにどのような授業展開が効果的なのかに焦点を当て授業改善に取り組めます。また、来年度は「考え、議論する道徳」に向けての研究の3年目になります。3年間の取組の集大成として、この2年間で取り組んできた「発問の工夫」や「場の工夫」を駆使し、研究を進めていきたいと考えています。

(高・戸出中)

第69回 研究大会報告

東 部 地 区

富山市立東部中学校

東部地区大会では、富山市立東部中学校を会場にして授業提案が行われた。

〈第1学年〉 加藤 佑典 教諭

主題 個性を発揮できる集団に向かって
(内容項目C (15) よりよい学校生活、
集団生活の充実)

教材 金賞を目指して
(出典：東京書籍「新しい道徳1」)



登場人物の合唱コンクールへの取り組み方への思いの違いを考えることで、集団として大切なことは何かを考える授業であった。机をコの字型に配置して、話しやすい雰囲気であり、活発な意見の交流があった。終末では、自分たちの合唱コンクールの取組にも参考にしたいと自分事として捉えていた。

部会協議では、主題に迫るための発問の工夫について話し合われた。

金光昭指導主事(東部教育事務所)からは、導入で問題意識・課題意識をもたせることの大切さや中心発問で、深い理解や考えに繋げるための工夫の在り方について助言をいただいた。

〈第2学年〉 吉田 朋矢 教諭

主題 家族とともに支え合うために
(内容項目C (14) 家族愛、家庭生活の
充実)

教材 一冊のノート
(出典：東京書籍「新しい道徳2」)

主人公の心情の変化を捉えることを通して、生徒自身の家庭にもある人間関係と重ね合わせ、身近に存在する家族愛について考える授業であった。意見を個人で考えた上で、自由に歩いて意見交換をする場を設定することで、多くの生徒と意見を交流することができ、家族への敬愛の念を深めようとする生徒の姿が見られた。

部会協議では、ねらいに迫るための中心発問の



工夫や、効果的な問い返しについて話し合われた。

日水徹指導主事(東部教育事務所)からは、「考え、議論する道徳」の視点から、本時のねらいに迫るための発問構成や問い返し、教材理解の大切さについて助言をいただいた。

〈第3学年〉 石川 智大 教諭

主題 差別や偏見をなくすために(内容項目C
(11) 公平、公正、社会正義)

教材 伝えたいことがある
(出典：東京書籍「新しい道徳3」)



差別や偏見を許さない断固とした姿勢でたたかう大石さんの姿を通して、公正、公平、社会正義について考える授業であった。個人で考えをまとめた後、周りの人と意見を交換し、全体に共有した。さらに再び個人で考えることで多面的・多角的に考えを深める場面が設けられた。

部会協議では、授業での問い返しや展開の時間のとり方等について話し合われた。

市村明恵指導主事(東部教育事務所)からは、「差別や偏見という難しいテーマのなか、導入のアンケート結果で関心を高めていたことや、全体での意見共有の後、再び個人で考えることで自分の問題としてより深く考える授業となっていた」と助言をいただいた。

綿屋実早樹(滑・滑川中)
木下 智玄(黒・清明中)
木下 陸(中・雄山中)

第69回 研究大会報告

西部地区

射水市立小杉中学校

西部地区大会では、射水市立小杉中学校を会場に授業提案が行われた。

〈第1学年〉 中島 俊行 教諭

主題 働く理由を見つめて

(内容項目 C 勤労)

教材 「私が働く理由」

(出典：光村図書「中学道徳① きみがいちばんひかる とき」)

美容師や清掃職員として働く3人のインタビュー記事から、働く理由についての考えを深める授業であった。



部会協議では、生徒の考えを深めるための発問や問い返しはどうあればよいかを中心に話し合われた。

三國大輔指導主事(西部教育事務所)からは、「生徒一人一人の思いや考えを引き出す問い返しの在り方」「生徒が互いの考えを共有する場の設定の重要性」について助言をいただいた。

西出 裕太 (氷・西條中)

〈第2学年〉 炭元 孝之 教諭

主題 法やきまりの意義

(内容項目 C 遵法精神、公德心)

教材 「違反摘発」

(出典：教育出版「中学道徳2 とびだそう未来へ」)

「違反摘発受け臨終に会えず」、「事故起こせば家族に悲しみ」という二通の投書から、法やきまりの意義について考える授業であった。それぞれの立場に立って多面的・多角的に考えることで、ねらいとする道徳的価値に迫ることができた。

部会協議では、「考え、議論する道徳」に向けた場の工夫や効果的な問い返しの在り方について話し合われた。



水口恭子指導主事(西部教育事務所)からは、「生徒の考えを引き出す発問の工夫の大切さ」「自己を見つめる振り返りの在り方」について助言をいただいた。

東 美紀 (砺・出町中)

〈第3学年〉 石黒 健太郎 教諭

主題 法やきまりの意義

(内容項目 C 遵法精神、公德心)

教材 「二通の手紙」

(出典：教育出版「中学道徳3 とびだそう未来へ」)



登場人物が受け取った二通の手紙を通して、他者を思いやる心にも触れながら、規則やきまりを守る大切さについて考えを深める授業であった。二通の手紙を比較したことで、きまりを守る意義についての話し合いが活発に行われた。

部会協議では、効果的な問い返しについて、話し合いが行われた。

龍瀧治宏指導主事(西部教育事務所)からは、「生徒が多面的・多角的に考えるための板書の工夫や、問い返しの在り方」について助言をいただいた。

西田 裕菜 (小・大谷中)

第69回 研究大会報告

第69回東部地区大会

京都産業大学の柴原弘志教授に「『特別の教科 道徳』における質の高い学習指導～『評価のフィードバック』を意識した授業改善・充実～」と題してご講演をいただいた。

1. 道徳科学習指導に臨む基本的視点

道徳科の授業では、学習指導要領にもあるように、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深め」ていくことが求められている。そこでは、授業のねらいや発問の意図を明確にし、生徒にどのような視点で考えを深めさせたいかを構想し臨むことが基本となる。

授業では、教師からの発問をきっかけに生徒自身による「自己内対話」を深めさせ、そこから生じた反応への問い返しや、交流の場の創出が重要な鍵となる。

2. 「評価の観点」と「評価の視点」

道徳科における評価の重要な対象は、「授業」と「生徒」が考えられる。授業に対する評価では、多面的・多角的に考えることができる問いが設定されていたか。生徒の発言を傾聴して受け止め、発問に対する生徒の発言等の反応を、適切に指導に生かしていたか。道徳的価値に対する理解を深める指導が為されていたかなど、『学習指導要領解説』に示された「評価の観点」から授業評価し、その改善・充実への取組に生かされることが期待できる。

一方、生徒の学習状況等に対する評価においては、「個人内評価」の視点が重視される。他者と比較するのではなく、一人一人の内面的な変化・成長に着目し、授業を通して見方や考え方がどのように変容したかを丁寧に読み取ることが大切である。そのためにも、生徒の発言やワークシートから思考の変化を把握することに加え、「自分のこれまでの体験から考えられたね」「他の人の考えと比較しながら発言できたね」等々、『学習指導要領解説』に示された「評価の視点」に基づく評価語による即時フィードバックが有効となる。

3. 「リレー道徳」による授業改善

「リレー道徳」とは、複数の教師が、異なる日時に同じ教材で授業を行うものである。各授業の板書(写真)から発問と反応等を共有し、気付いた点をメモとして残し、それらを基に他の教員が授業を展開していく形式である。そこでは、実施した授業に対する改善へのアイデアが出し合われるため、次に授業を行う教師は改善点や工夫すべき点を意識して授業に臨むことができる。「授業→共有→授業」というサイクルを繰り返すことで、発問や問い返しの質がより高まっていく。

さらに、授業の工夫や改善点を翌年度にも引き継ぐことが可能であり、授業モデルが次の年度の教員にも継承され、授業の質の向上が、より発展的なものになることが期待される取組である。

(下・朝日中 舟本 祐)

第69回西部地区大会

岐阜大学大学院の柳沼良太教授に「『考え、議論する道徳』の創意工夫～議論する場の工夫～」と題してご講演をいただいた。

1 道徳教育の重要性と社会的背景

教科化から8年が経過し、次期学習指導要領の改定が検討されている中、教育現場ではウェルビーイングの実現に向けた取組が求められている。道徳教育を通して、生徒が道徳的価値を理解し、信頼できる行動指針を身に付けることは、学校教育全体の重要な課題となっている。

2 「考え、議論する道徳」の実践と意義

「考え、議論する道徳」の実践は、生徒が道徳的善と善の対立や葛藤に向き合い、主体的に判断し、行動する力を育てることを目指している。中央教育審議会では、「考え、議論する道徳教育の徹底」が求められている。授業では、道徳的価値の葛藤を解決するための議論が中心となり、多様な視点をもつことが促される。

3 道徳実践の課題

授業で学んだ理想的な価値観が、実生活で必ずしも実践されるとは限らず、いじめ問題等の具体的な課題に対して、道徳的な対応が十分に行われていない現状がある。そのため、生徒が道徳的価値を理解し、日常生活の中で実践する力を育むことが、大きな課題となっている。

4 学習指導要領改定と道徳教育の方向性

次期学習指導要領では、主体的で深い学びを重視し、道徳教育の質を向上させることが目指されている。OECDのラーニング・コンパスに基づき、生徒が自己の目標をもち、振り返りながら行動できる力を育てることが求められており、道徳教育も社会の変化に対応した内容へと進化する必要がある。これからの道徳教育に求められることは、生徒が自らの価値観を見つめ直し、社会に貢献する力を育むことである。

5 教材の工夫と授業展開による深い学びの促進

生徒の実態を把握し、生活体験からテーマを考え、教材と類似した問題場面を取り上げることで、学びへの関心を引き出すことができる。また、正解を導く発問から解を限定しない発問に変えることで、生徒は理想の自己像や社会像を考える授業を通じて、道徳的価値を深めることが可能となる。生徒が本気で考え、議論したい場がどのようなものかを教員が見極めることが重要である。

(南・福光中 黒谷ゆりや)